

中国における村上春樹『ノルウェイの森』研究史

著者	許 翠微
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	18
ページ	103-113
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00002332/

中国における村上春樹『ノルウェイの森』研究史

許 翠微

要 旨

本論文は中国での現代日本作家村上春樹の名作『ノルウェイの森』に注目し、この10年近く中国で発表された『ノルウェイの森』論を中心に、これまでの研究内容や研究特徴をまとめた。特に中国ならではの中日作品比較研究を具体的な例を挙げつつ、詳細に論じた。各研究者の観点を紹介すると同時に、筆者自身の異なる視点も加えようと試みた。そして再度作品そのものに戻り、各登場人物に関する中国研究者の観点を踏まえながら、彼らに関する見解を整理した。末尾に『ノルウェイの森』の新しい研究課題を付した。

〔キーワード〕 比較作品 『狂人日記』 『赤い高粱』 『生きる（活着）』

はじめに

現代日本作家の中で、村上春樹は常に注目を浴び続けてきた。彼は1979年『風の歌を聞け』でデビューして以来、世間に高く評価され、たくさんの優れた小説を書いてきた。彼の作品は老若男女、日本国内外を問わず広く人気がある。その中で、一番人気があるのはやはり1987年出版された『ノルウェイの森』である。『ノルウェイの森』は累計1000万部を超える超ベストセラーとなった作品である。そのため、日本国内でも海外でも研究者たちに注目されている。本稿では中国における最近の『ノルウェイの森』研究史を整理する。まず第1章として研究史を概観。第2章では特に中国内の文学作品と比較した論考を中心に、『ノルウェイの森』研究の可能性を探る。その上で最終章第3章で筆者自身の『ノルウェイの森』の主要登場人物観を過去の言及に絡めながら整理したい。

第1章 中国における『ノルウェイの森』研究史

中国では小説発表されて以来、継続的に研究がなされている。中国の研究論文検索サイトで『ノルウェイの森』を検索すると、何百篇の論文が現れる。研究の角度もさまざまである。その中、2012年までの研究は『《ノルウェイの森》人物像分析：文献まとめ』（周倩、李光貞）の中でまとめて紹介されている。この論文によると、2012年までの研究論文は6つのテーマに分類が可能である。人物像に関する研究、主題に関する研究、作品の創作手法に関する研究、各国語に翻訳されたものに関する研究、他の作品との比較研究及びその他の研究である。その中で主題に関する研究はほぼ「恋愛小説」・「成長小説」・「癒し小説」及び「生と死の関係」や「自己救済」などを巡る言及が多い。創作手法は主に言葉、作品の構成、ストーリー展開などに関する研究である。翻訳に関する研究では中国側は中国語に訳された、いくつか違うバージョンの相違についての研究が多い。それに加えて、人物像では「僕」「直子」「緑」「永沢」に関して言及が集中している。他の人物について言及するものは殆ど見えない。彼らについて、どのような評価があるのかは、本稿第3章で詳細に確認することとする。また作品の比較論については小説の中に現れた「僕」の好きなアメリカ小説との比較研究に集中している。

2012年以降現在まで、5年が経過しているが『ノルウェイの森』論はどのような展開をみせているか。この5年間で『ノルウェイの森』をテーマにしている論文は56篇あるが、研究内容は相変わらず

ず上記の5面に集中している。新しい視点を見出すことに苦慮しているといった風情である。以下、比較的新しいと感じられる視点に関して紹介する。

前節に述べたように、人物像についての研究はほぼ「僕」、「直子」、「緑」、「永沢」に集中しているが、2015年「非現実世界の中の現実的な存在 — 『ノルウェイの森』の中のレイコについての解説」(宋陽)というレイコ論が存在する。この論文によると、小説の中でレイコだけ「自己救済」に成功しているという。それだけでなく彼女は、直子とワタナベの間にいて、2人に愛とは何かを教えてやる。また、ワタナベを死から現実世界に連れ戻す役目も負う。しかし小説の最後にワタナベはまだ迷っている。その点において、レイコは「ワタナベへの救済」においては不完全だと主張している。また2016年「村上春樹『ノルウェイの森』人物色彩分析」(王詩雨)は、登場人物の性格特徴を分析し、色彩と性格の関係理論を対照しながら、登場人物の色彩を論じた。結論として、黒の永沢、白の初美、灰色のキズキと直子、緑色の緑、多彩のワタナベ、黄色のレイコ及び赤の突撃隊とまとめている。以上の2論文は全く異なる視点から、中国における『ノルウェイの森』研究に新しい可能性を持ち込んだといえることができる。

第2章 中国における比較作品的研究

本稿のはじめに述べたように村上春樹の『ノルウェイの森』は世界中の研究者に注目され、研究されている。そのため、多くの研究論文において視点やテーマなどの重複が起こることは避けられない。それ故、本稿では中国に独特と思われるものを紹介する。

その最たるものは『ノルウェイの森』と中国の作品の比較研究である。中国では小説の人物論ばかりでなく、作品比較論も徐々に変化しつつある。かつてはアメリカ小説との比較研究に限られていたのとは異なり、多くの中国の有名な小説との比較研究も現れ始めている。以下にいくつかを紹介する。

(1) 『狂人日記』と『ノルウェイの森』

まず、2010年「『狂人日記』と『ノルウェイの森』の人物像比較」(庄萃)がある。『狂人日記』は魯迅の処女作である。家族や、周りの者はみなカンニバルであり、いずれ自分を食べようと企んでいるという被害妄想に取り憑かれた男の日記である。小説の最後に「四千年來、時々人を食う地方が今ようやくわかった。私も永年その中に交っていたのだ。」「私は知らぬままに何ほどか妹の肉を食わないことがないとも限らん。現在いよいよおれの番が来たんだ……」「四千年間、人食いの歴史があるとは、はじめ私は知らなかったが、今わかった。真の人間は見出し難い。」「人を食わずにいる子供は、あるいはあるかもしれない。救えよ救え、子供……」というような表現がある。

『狂人日記』において魯迅は、狂人の話を通して当時の社会に対する失望や不満を表した。狂人の口を借りて、当時の民衆は話したくても話せない内容のことを話した。狂人の口を借りて、当時の封建社会の「人食い」の本質を暴いた。旧封建文化伝統や旧思想、旧道徳を批判した。その一方、『ノルウェイの森』の主人公ワタナベは、当時日本の若者の一人として、その時代背景の下で、当時の生活に対して孤独や喪失感を感じた。また、人生に対して消極的な態度などを取っていることから、当時の若い人たちは狂人ではないけど、一種の病人だと言える。魯迅の「狂人」でも村上の「病人」でも当時の社会に流された人だと言えよう。

この2作品のさらなる類似点は、魯迅と村上はともに小説創作上には民族文学を継承している同時に、西洋文化の影響も強く受けているという点である。『狂人日記』はロシアのゴッリ『狂人日記』に影響を受けており、村上もアメリカのフィッツジェラルド『グレート・ギャツビー』の影響を強く感じさせる。庄萃はこの論文において2作品の作者の創作背景や主人公の性格などに類似した点があると判じている。

この論文では2つの小説は其中で、それぞれ「狂人」と「病人」の目線から、この世を見て批判したと論じている。魯迅は作品中、頻繁に比喩や諷刺などの手法を用いて当時の社会や政府を批判する。庄平は村上春樹の小説の中にもそういう特徴があることを指摘している。例えばワタナベや直子たちのような「病人」が自らの言動や経験を通して、当時の社会を風刺し、批判するとするのである。加えてこの論文は作品のみならず両作家の創作特徴そのものをも比較考察している。近年中国の文学研究者たちは村上春樹と魯迅との比較研究を行っている。筆者の考えでは、確かに両者の作品創作は西洋の影響を受けており、皮肉や諷刺の創作特徴も共通点が多い。確かに比較研究する価値があると思われる。このように多方面に渡る比較考察の視点を提示しているという点において当論文は非常に斬新で興味深いといえる。

(2)『赤い高粱（コーリャン）』と『ノルウェイの森』

次に、2015年になると瀋琛他による「中日文学名作中の生死観比較 — 映画『赤い高粱（コーリャン）』と『ノルウェイの森』を例として」が現れる。2つの映画中に流れる死生観を〈生命を賛美する『赤い高粱（コーリャン）』と〈「死」を推賞する『ノルウェイの森』〉という形で対比させる論文である。

映画『赤い高粱（コーリャン）』は莫言（モー・イェン）の同名小説を原作とする映画である。舞台は、1920年代の中国山東省。語り手である「わたし」の祖母・戴鳳蓮は、小さく可憐な纏足を見込まれ、宿病患者で造り酒屋の男の元に嫁ぐことになる。御輿で嫁入りに向かう途中、彼女は強盗たちに襲われるが、御輿の担ぎ手の青年に救われる。初めて実家に帰る途中で、婚礼の際に彼女の輿を担いでいた青年に真っ赤なコーリャン畑に連れ込まれて強姦される。家に戻ると、夫とその親が殺害されている。戴鳳蓮が造り酒屋を継ぐと、コーリャン畑の青年が杜氏としてやって来る。コーリャン畑で結ばれた日に身ごもった子供・豆官が生まれ、青年と愛を育むようになる。しかし豆官が14歳になる頃に日本軍が侵攻。戴鳳蓮は日本兵の銃弾により倒れる。

論文では、この小説の中の絢爛たる愛と美しい命の描写と同時に、中国人の持つ生命力が強調される。中国人は輪廻や生まれ変わりなどを信じず、現世で生きることを大事にする。さらに、伝統儒教文化の影響で、意義のある死を求める。それゆえ、国が侵略され、生死存亡の危機に臨む時、中国人の意識の中には、国や人のために死ぬのが一番価値がある死だという考えがある。「英雄主義生死観」である。中国では文学作品を創作する時には時代や政治背景を考慮しながら執筆される。『赤い高粱（コーリャン）』もこのような作品である。主人公の生死や時代と政治背景を深く関わっている。一方で日本文学は、生死は個人の選択で、社会と政治と関係なく、人の心理状態そのまま反映するものだと言文には述べられている。『ノルウェイの森』の登場人物は死を選ぶ時、「個人の選択」が最も強く影響する。第1章に「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」という文があるが、日本人は死を怖がらず、生を尊重しつつ、死も楽しんでいる」とこの論文では捉えている。だからこそ、日本人は自ら死を選ぶ。中国人は生を大事にしているが、自ら死を選ぶ際も、国や民族大義のためというように考えがちである。以上この論文では両作品に現れた「生」と「死」に対する考え方の違いに着目して書かれている。

中国の作家莫言（モー・イェン）はノーベル賞受賞後、ますます注目されている。日本の村上春樹も近年ノーベル賞の受賞候補として注目されている。文学界の影響や地位を考えてみれば、両作家には共通点が多く、彼らの作品を比較研究する視点も理解できる。また「莫言と言えばまず『赤い高粱（コーリャン）』と言うのと同様、「村上春樹と言えば、『ノルウェイの森』』と考える読者は多い。その意味でこの2作品の比較論の出現は必然的である。しかし、小説に書かれた時代や社会背景が異なるため、人物像の比較には注意が必要である。

莫言と村上は生まれ育った社会環境も全く異なり、2人の視点や創作手法、特徴なども違っている。この論文では両作品に現れる主人公の「生」と「死」に対する考えの違いに注目している。論文中で論じられた中日の「生」「死」に関する考え方の違いも理解は可能である。しかし、元来異なる時代を舞台とした小説であり、主人公の死生観が違って当然である。論文の中で読み解かれる主人公たちの考え方の違いはこの2作品でなくとも存在する。また『赤い高粱（コーリャン）』の中で「死生観」に関して触れられるのは全体中ほんの一部だけで、この2つの作品で「死生観」を論じるのには少々無理があるという印象が強い。作家の境遇の類似という点のみで彼ら2人の作品を比較研究することにはそれほど多くの可能性があるとは考えにくいというのが筆者の考えである。

(3) 余華『生きる（活着）』と『ノルウェイの森』

ここでは2015年6月に黄華莉他によって書かれた『『生きる』と『ノルウェイの森』の死生観之比較』について見る。小説『生きる』のあらすじは以下の通りである。主人公の福貴は中華民国時代に地主の家で生まれる。ギャンブル三昧の放蕩生活に明け暮れるようになり、妻の家珍には逃げられ、家の財産をもすべて失う。彼の父も亡くなり、小作農となるも、国共内戦が始まり国民党軍に徴用される。国共内戦、三反五反運動、大躍進政策、文化大革命といった時代の渦の中に巻き込まれ、福貴は生きる苦しみと闘うことになる。

主人公福貴は父は事故死、母と妻は病死、息子と娘夫婦及び孫も皆事故で亡くなる。次々に起こる身近な人々の死を経験する中、福貴は諦めずに生きる。彼の生き抜く秘訣は「耐えること」である。彼は生きることによって、「死」と戦う。作家余華の話では福貴は世界で一番尊敬すべき人で、彼は他の人より死を選ぶ理由を多く持つが、それでもなお生き続ける。一方、『ノルウェイの森』の登場人物の中には、抱えた悩みや苦しみで自ら死を選んだ者も多い。主人公も知人・友人の死に戸惑いを見せる。筆者は前者は「生によって死を拒む」、後者は「生きてはいるが死んでいるが如し」と述べた。福貴は苦境の中で一度も自殺を考えたことがない。生によって死と対抗する、生によって自分の価値を実現しようとする。『ノルウェイの森』の大部分の登場人物は受動的に生きており、「死」を自らを救助する方法と考えている。両者の違いは中日の死生観にあると余華は分析した。中国人は命を尊敬し、生きている限り、いつか必ずよくなると信じている。苦しんでも悲しんでも生きていく。また、福貴は「人は普通でいい、命を落とすまで争う必要がない。私みたいな人は、出世してはいないが、長生きしている。周りの人はみな死んでしまったが、私だけはまだ生きている。」と語った。確かに中国人は「人の生と死または富と貧困は天が決めるので、争う必要がない」という考えも持っている。以上のような中国人の死生観に対して、日本人は桜のように命が短くても大丈夫だが、生きているうちに必ず美しく咲く¹⁾。それ故、日本人にとって「自殺」は「壮美な死」と捉えられる。実際に芥川龍之介、三島由紀夫、川端康成、太宰治など、多くの文学者たちが自殺により命を絶っている。『ノルウェイの森』の自殺を選んだ登場人物たちにとって「死」は大きな出来事ではない。むしろ現実逃避と自我救助の最大の方法だったとこの論文では主張される。

黄華莉他はさらに、この2作品は日中死生観の違いを体現すると同時に、ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーの実存主義の死生観の影響を受けていると述べた。そのため、2作品は最後まで死に向けて生きるという考えも体現しているという。

『ノルウェイの森』を読んで、最も気になるのは作品の中に頻出する「死」に関する話題であろう。この作品を読むと、登場人物（或いは作家自身）の持つ死観は、中国人の多くと異なっていると感じざるを得ない。その意味では死生観を比較する以上、「死生観」を主題とした作品を通して論じる必要がある。多くの論文に目を通しながらそのようなことを漠然と考えていた。そのような時『生きる』という小説との比較論に行き当たった。主人公の生きる時代こそ異なるが、主人公のさまざまな

経験を通して作者自身の死生観もよくうかがえる作品である。加えて、中日死生観の違いを理解する手助けとなる。黄華莉他は両作品の主人公の経験を詳しく対照しながら、登場人物の「生」と「死」に対する態度の相違を述べた。非常に分かりやすく、論点鮮明な論文である。筆者としては、このような研究こそが真に「比較研究」であると言い得ると考えている。

第3章 『ノルウェイの森』 主要登場人物たちに沿いながら

さて本章では、筆者自身の『ノルウェイの森』人物観を、様々な言及と関わらせながら整理しておく。この小説が発表されて30年が経過した。発表された当初、「100パーセントの恋愛小説」²⁾という宣伝広告が帯に書かれ、青春小説や都市小説、癒し小説など様々な側面から楽しまれてきた。

小説の中では好きな音楽を聴き、小説を読み、コーヒーやワインを飲む。これらの習慣から、この小説は西洋文化の影響を受けて書かれたものであるという点が特に中国人である筆者には強く感じられる。さらに、作品中の性的描写に関しても印象が強い。読んだ当初はただのポルノ小説だという印象も持ったが、読み通すうちに、性的描写から主人公たちの孤独や虚しさ、及び小説の悲劇を強く感じざるを得ない。また、頻繁に現れる「死」の話題についても、日本人の死に対する独特な考えを表現しただけでなく、作者は死を通して、生を強調したい気持ちが強くうかがえた。この小説の主題は死というより、生の方にあると筆者には思われる。村上春樹は様々な「死」を通して、「人生はどんなに辛くても、最後まで生きていくしかない」と読者に伝えたかったのではないかとさえ思われる。

この小説の人気のある最も重要な理由は、それぞれの登場人物が鮮明な性格を持っている点にある。皆完璧な人物ではないが、自分なりの個性がある。長所もありながら、短所もある。そういう人物の設定で、読者が読んで共感を持ちやすい。では、具体的に見てみよう。

(1) 僕（ワタナベ）

まず、主人公の「ワタナベ」に関して最初に見よう。中国における「ワタナベ観」は「消極的であり、受動的な人である」というものと「ちょっと変な人だけど、悪い人ではない」という評価に大きく分けている。例えば『ノルウェイの森』の三角関係における「僕」をめぐる（孫忠怡）では、「僕」は総じていえば、消極的な人であり、人に対しても、事に対しても、受動的な姿勢を取り続けた存在であったと言える。…（中略）…直子－緑－「僕」の三角関係における「僕」の愛情観からは「僕」の浮気や狡猾も見出される。」のようにワタナベの暗黒面が指摘される³⁾。一方「村上春樹とノルウェイの森」（李会珍）では、「主人公「僕」は誰にでも優しい人で、表面的には語り手の役割を演じられているようだが、実はみんなから聞き手とされている。作中、誰も彼に苦悩を述べ、慰めを求めている。現代の人々も登場人物のさまざまな悩みに自分の悩みを投影し、「僕」に聞いてもらうことで、心が慰められるのではないだろうか。彼はみんなの精神の癒しとして存在している⁴⁾。」というようにワタナベの健康人としての側面が強調される。「試論村上春樹作品の孤独情景——『ノルウェイの森』主要人物分析」（張麗娜）でも「ちょっと変な人だけど、悪い人ではない。友達に対しては、信頼できて、素晴らしい聞き手である⁵⁾。」と同様の指摘がある。また、「村上春樹『ノルウェイの森』の主人公渡辺の恋愛孤独感分析」（韓春紅他）においては「ワタナベは話し方は変だけど、正直な人で、信頼できる⁶⁾」と言い換えられる。そのような中、筆者としてはワタナベに関して以下のように考えている。

彼は親友キズキの突然の死に対して大きなショックを受けている。何に対しても深く関わらないようにして生きようとしている。しかし、毎日好きな本を読んだり、ワインを飲んだり、好きな音楽を聴いたりして、品のある生活を一方では過ごす。ルームメートである突撃隊の生活習慣に対して文句を言いながらも、彼がいなくなっても突撃隊の遺してくれた「清潔な生活習慣」を守りつづける。ま

た、寮友達である永沢とも、長く親密な交友を持つが、ある時関係を完全に断つ。永沢が恋人ハツミを最終的に自殺に追い込んだとワタナベは考えたためである。それによって永沢に対する不満な気持ちがついに爆発したのである。このような点からみると、ワタナベは正義感が強いという面も持ち合わせていると感じられる。直子に関しても最後まで守っていかうと考え、彼女直子がいるため縁に対しては距離を置いて付き合ったりもする。非常に生真面目な面も見出すことができるのである。

筆者自身のワタナベ観は、先述の2分類のうち、後者に近い位置づけだと言える。

(2) 直子

次に中国における「直子観」であるが、直子に対しては、ワタナベと違って、まったく違う意見がなく、ほぼ悲劇的な人物だと考えられている。ただ、彼女の悲劇の原因に対してはいくつか説がある。例えば、前掲「試論村上春樹作品の孤独情景 — 『ノルウェイの森』主要人物分析」では、以下のよう直子を描いた。直子は物静かで古典美が溢れて『紅樓夢』の林黛玉の如く、愁傷と孤独とが常に感じられる人物である。真っ黒に茂った森林の中で道を迷っていて、寒くても助けてくれる人もいない孤独な人である。直子の孤独は社会との脱離にある。ずっと脱離しているため、自閉的になって、あたかも真空状態のようでさえある。彼女はキズキより強いワタナベの助けが必要である。ワタナベの助けによって、迷った森林の中から脱出しようと彼女も試みた。しかし結局過去を忘れることができず、最後にはキズキと同じく自殺を選ぶ。

また、「村上春樹と吉本バナナ作品の比較研究 — 『ノルウェイの森』と『キッチン』を例として」(李丹)では、やわらかで弱々しい直子は暗黒の過去から脱出できず、阿美寮に入ったが、それは逃げるというより、「人生の生まれ変わりへの渴望だ」とする⁷⁾。結局失敗して死を選んだが、死は彼女にとって一種の望みでもあり、一種の解脱でもある。

筆者としては直子に関して以下のように考えている。彼女は最初から最後まで悲劇的な存在だと思われる。人生の中にずっと死に囲まれている感じである。小さい時姉の死からショックを受けた上に、幼なじみでもあり、恋人でもあるキズキも急に自殺してしまって、彼女にとって致命的だと言っても過言ではない。その二重ショックのため、彼女はもう普通に人と付き合うことができず、他者依存的な傾向が生じていた。そのような時「ワタナベ」と再会した。その後、2人は頻繁に会い始める。会話の内容は日常のごく些細なことが殆どで、心と心の深い交流には至らない。直子はワタナベに対する気持ちが「愛」であることを確認できないまま、誕生日に彼と深い関係を持ってしまう。そんな自分が結局どう生きていくべきか分からなくなって、結局は死を選んだと筆者には思われる。

(3) 緑

次は中国における「緑観」である。ほとんどの緑論は、直子と対照的であるといえる。本論文で度々参照している張麗娜の論考では、緑は外見は強そうに見えるが内面は孤独だと分析する。張麗娜氏によると、緑は他の人物、例えば永沢や直子やレイコなどが程度の差こそあれ「理想の世界」で生活しているのとは違い、常に現実の世界に生きている。また緑の役割は、ワタナベと外の世界との連絡役を演じているとする。直子が「自閉、幻、純潔と静寂な冥界」を象徴し「非現実」な存在であるのに対し、緑は「現実、解放、濁ってうるさい現世」を象徴している。また、「村上春樹小説芸術研究」(尚一鵬)では、不運な直子より緑のほうがずっと運が良く、内向的で弱々しい直子と比べると、緑は外向的でおしゃべりである。完璧でなく、女らしさも足りず、上品ではない緑だからこそ、もっと人間らしく、ワタナベに好かれたと考えるのである。

筆者は実のところ、女性としては緑のことがあまり好きではない。若い女性でありながら、頻繁にセックスのことを口にする。このような点も気がかりである。しかしそれは彼女の寂しさの体现かも

しれないと思う。普通の女性と異なる話をすれば、人の目を引くことができる。また、彼女は直子より強く、明るい。病気の父の世話をしながら、実家の生業である本屋の手伝いもしていて、学校にも真面目に通っている。ワタナベに惹かれ始めると、前の彼女とさっぱり別れる。そしてその後大胆に告白する。いかに勇気があって、自分の思う通りに生きている人だという良い点も十分に持ち合せている人物ではある。

(4) レイコ

中国における「レイコ観」であるが、従来「特別な存在」と考えられてきた。まず、「村上春樹小説芸術研究」(尚一鵬)では、レイコの価値観は直子と緑のそれとは異なり、一般の人間に近い。また「僕」の潜在意識の中で直子はレイコと重なり、特に小説の最後の部分を読むと一種の「分身」のようである。小説は当時 37 歳のワタナベの直子に関する回想である。もし直子が生きていたとすれば、ワタナベより半年上のちょうど 38 歳である。小説の中では最後にワタナベは 38 歳のレイコと深い関係になった。尚一鵬氏によると、これは現実と追憶の錯覚であるかもしれない。

いずれにせよレイコという人物像は興味深い存在であると彼は述べる。

また、張麗娜によると、レイコは魅力的な存在で、姉のように周囲の面倒を見ている。ユーモアもあり、正直で、観察力も鋭い。直子と緑の综合体だと彼女は分析する。直子の友人として、直子の最後まで付き添った。レイコは緑と同じく、ワタナベを救助したと言える。

「死亡崇拜下の人道的配慮 — 村上春樹小説の死亡叙述研究」(周瑩)では、レイコはワタナベの生きている此岸と直子の生きている彼岸を結びつける人物であるとする。彼女がいるからこそ、両世界の疎通ができた。これと似た観点は「非現実世界中の現実存在 — 『ノルウェイの森』の中のレイコ解説」(宋陽)にも見られる。宋陽によると、レイコは非現実世界としての阿美寮から自らを救い出すことができた。また、ワタナベを現実世界に連れ戻した。

筆者のレイコ観は以下のとおりである。作品の最後彼女がワタナベと関係を持つまでは、彼女のことが好きであった。ワタナベと直子の間の架け橋のような存在で、ふたりの相談相手にもなっている。二人を慰めたり、アドバイスしたりもする。自分のこともはっきりわかって、しっかりしている人だと思っていた。しかし、最後になぜワタナベと親密な関係を持ったか、よく理解できないでいる。もしかすると、レイコは最初会った時からワタナベのことが好きだったのであろうか。このように考え始めると、最後のシーンの存在故に、筆者自身はレイコの性格や存在に対して否定的にならざるを得ない。

(5) 永沢

永沢という登場人物であるが、「試論村上春樹作品の孤独情景 — 『ノルウェイの森』主要人物分析」(張麗娜)では、ますます孤独になる永沢について描かれている。客観的に見れば、永沢は完璧な人物である。ハンサムで、頭もよくて、成績もよいし、能力もある。東大卒業後、外務省の試験も合格し将来外交官になる人である。このように優秀な人物ではあるが、他人に対しては一切、優しい感情を持たず、人を愛することができない。彼は高度に発展している資本主義社会の典型的な人物である。永沢という人物を通して資本主義社会の物質世界の豊かさと精神世界の虚しさを十分に表現していると本論文では指摘される。

また、前掲「村上春樹と『ノルウェイの森』」(李会珍)もこれに近い。「永沢くんは外交官志望の東大学生で、頭脳的にも、人望的にも、経済的にも、家庭的にも性的にも卓越しており、寮長も一目おく存在である。彼の類まれな優越性を支えているのは、利己的な性格なのである。…永沢くんのそういう傲慢なところが彼を孤独の世界に導く。……物質の豊富な現代社会で、コミュニケーション能

力の低下した現代の人々が深い人間関係を作り出せないことから感じている喪失感、孤独感といった悩みや心の闇を深くした。」

以上のようにあまり肯定的な評価がないようである。しかし永沢には評価すべき点も存在する。素敵な彼女がいながら、誰とも結婚する気がなく、外でよく女遊びしていて、プレーボーイというイメージがあるが、将来に対してちゃんと目標を持って、能力もあり、努力もする、そのような現実的な側面である。そのため、全面的に否定すべき存在ではないと筆者には思われるのである。

(6) ハツミ

永沢の彼女として品のあると言われているハツミの存在に関しての言及も多い。張麗娜によると、ハツミは上品で、思いやりもあって、優秀である。しかし小説の中で最も悲劇的な人物でもある。直子には理解しあって、愛し合っているキズキもいるし、自分のことをよく考えてくれるワタナベもいる。しかし、ハツミには誰もいなかった。彼女の悲劇のもとには自分の弱さと自我の欠乏にある。自分の人生のすべては永沢のために存在している。そういう考えは非常に自己中心の永沢と正反対である。価値観の違いがハツミの悲劇の元になった。

また、李丹は、ハツミは最初から永沢がどのような人物か知りながら、やはり少女の純粋な気持ちで永沢を待つことにした。そして、その理想や希望は泡のように消えた時、彼女は自ら死を選んだとする。

以上の論と少々趣の異なる論としては尚一鵬のものを上げることができる。ハツミは美人ではないが、直子と緑にはない鋭い目があって、家庭は裕福で、優秀な永沢と一緒にいるために努力を惜しまなかった。自分の恋愛相手を選ぶ時、目が高く、実行力もある人物だと尚は述べる。

筆者自身のハツミに関する見方はこうである。主人公のワタナベから見ると、ハツミは完璧な女性で、憧れの存在であった。彼女は最後に死を選ぶが、それは他の男性と結婚しても、心中で永沢を思いつづけたためである。そのため彼女は幸を手に入れることが出来なかったのである。しかし、長い人生で重要なのは恋愛だけではないだろう。自分を捨てた男のために自殺するのは愚かな行動だ、と彼女に言いたいのである。

(7) 突撃隊

最後に突撃隊に関してみておこう。彼に言及した論文は多くないが、非常に興味深いものとして「後現代語境下の村上春樹」(楊炳菁)がある。ここでは、突撃隊は、ただ小説のユーモア度合いを増すための存在ではなく、彼には主人公自身の平凡がデフォルメする形で表されていると述べられている。つまり、ワタナベが突撃隊を嘲笑する時、実は自分の平凡への嘲笑となる。また突撃隊の最大の特徴は彼の潔癖症や右翼的ないで立ちにあるのではなく、その平凡に対する麻痺であると分析している。

筆者から見ると、彼は夢を持って、几帳面な人だと思われる。頑固な一面も見えるが、こういうような人は最後に成功することが多い。しかし突撃隊の場合、彼は突然に小説の中から姿を消す。死んでしまったか、病気になってしまったか登場人物にも読者にも知らされることはない。作者は彼の存在を通して、当時の社会や学校には異常な側面があることをよく伝えてくれる。

おわりに 中国における『ノルウェイの森』受容の課題

村上春樹『ノルウェイの森』は発表されて以来、全世界で各世代の人々に読まれ続けてきた。国の違いや時代の流れにより、作品への理解も一定ではない。先行研究に目を通し、各登場人物についての評価を紐解く中から、同じ人物に対しての理解も大きく変化していることに驚きを覚えた。しかし、

時空を超えてこの『ノルウェイの森』は読者にとって大いに魅力的な作品だと改めて感じた。

本稿は近年中国での『ノルウェイの森』論のまとめを通し、今中国での最も新しい研究視角としての中日作品比較論に焦点をおき、異なる時代、異なる作家、異なる「死生観」等から、作品の相違点を探った。加えて各人物に対する意見の相違を整理した。

時代の移り変わりによって、中国の若い世代は精神的に弱くなってきている。従来の「どんなに辛くても生きていく」という考えも薄くなりつつある。激しい競争に負けて、自殺を選ぶ人も増加しつつある。本稿で述べたような「中国人の死生観」も徐々に変わってゆくのだろう。また、中国の改革開放により、西洋文化の影響も大きく受け、性に関する保守的な考えもいずれ消える。我々が最初に『ノルウェイの森』を読んで覚えた違和感も、若い世代から見ると、存在しない時代が来るのかもしれない。このように考えると、これからの若い世代がこの作品をどう受け入れるかが非常に楽しみな気が筆者にはする。

村上春樹は『ノルウェイの森』の中にリアリティーのある人物を描き、人々の運命や生死に対する考えなどを忠実に描くことで世界中の読者を引き付け続けてきた。同時に、過剰な性的描写のため、一時的に中国ではポルノ小説として発禁処分に付されたことがある。そのことは中国で同じ「発禁処分」になった『上海ベイベー』という小説のことを思い出させる。発禁小説という観点から、それら両作品を比較検討したいが、それに関しては本稿と並行して執筆中の「『ノルウェイの森』と『上海ベイベー』比較研究」を参照されたい。

なお本論文は、2017 年度中国国家海外客員研究員派遣制度の受け入れ先である平安女学院大学国際観光学部教授・平居謙先生のご指導を受けて作成したものである。この場を借りて先生に対して深い感謝の思いを記しておきたい。春学期聴講した、平居先生の『ノルウェイの森』に関する授業の中で展開された先生と学生の熱論を聞いて、非常に刺激を受け、本論文を書くことにした。平居先生から論文構成にはじまり言葉の使用まで、各方面のご指導をいただいた。本当にここまでできたのは先生のお蔭である。

注

- 1) 孔子『論語』；劉琦訳、吉林文史出版社 2009 年出版、130 ページ
孔子《论语》；刘琦译、吉林文史出版社 2009 年出版、130 页
- 2) 村上春樹 1987 年 9 月『ノルウェイの森』講談社初版の帯に書かれた言葉
- 3) 孫忠怡 2008 年『ノルウェイの森』の三角関係における「僕」をめぐって
孫忠怡 2008 年从《挪威的森林》中的三角关系来解读“我”；吉林大学硕士学位论文
- 4) 李会珍 2007 年村上春樹と『ノルウェイの森』
李会珍 2007 年村上春樹と『ノルウェイの森』；哈尔滨理工大学硕士学位论文
- 5) 張麗娜 2008 年試論村上春樹作品の孤独情景 — 『ノルウェイの森』主要人物分析
张丽娜 2008 年试论村上春树作品中的孤独情景 — 《挪威的森林》主要人物剖析；中国海洋大学硕士学位论文
- 6) 韓春紅、馬曉光 2014 年村上春樹『ノルウェイの森』の主人公渡辺の恋愛孤独感分析
韩春红、马晓光 2014 年析村上春树《挪威的森林》渡边的恋爱孤独感；《白城师范学院学报》；白城师范学院
- 7) 李丹 2014 年村上春樹と吉本芭娜娜作品の比較研究 — 『ノルウェイの森』と『キッチン』を例として
李丹 2014 年村上春树与吉本芭娜娜作品的比较研究 — 以《挪威的森林》和《厨房》为例；吉林大学硕士学位论文

参考文献

- 村上春樹 1987 年『ノルウェーの森』（上、下）講談社
- 周倩、李光貞 2012 年『《ノルウェーの森》人物像分析：文献まとめ』
- 周倩、李光貞 2014 年《挪威的森林》人物形象分析：文献综述；《科技视界》；《科技视界》杂志社
- 宋陽 2015 年「非現実世界の中の現実的な存在 — 『ノルウェーの森』の中のレイコについての解説」
- 宋阳 2015 年非现实世界中的现实存在 — 关于《挪威的森林》中玲子的解读；《时代文学》；时代文学杂志社
- 王詩雨 2016 年「村上春樹『ノルウェーの森』人物色彩分析」
- 王詩雨 2016 年村上春樹《挪威的森林》人物色彩分析；《西安石油大学学报》；西安石油大学
- 庄萃 2010 年「『狂人日記』と『ノルウェーの森』の人物像比較」
- 庄萃 2010 年《狂人日记》与《挪威的森林》中人物形象之比较；《韶关学院学报》；韶关学院
- 潘琛、白雲霞、王丹、王潔瓊 2015 年「中日文学名作中の生死観比較 — 映画『赤い高粱（コーリャン）』と『ノルウェーの森』を例として」
- 沈琛、白云霞、王丹、王洁琼 2015 年中日文学名著影视改编中的生死观比较 — 以电影《红高粱》和《挪威的森林》为例；《河北北方学院学报》；河北北方学院
- 黄華莉、靳明全 2015 年「『生きる』と『ノルウェーの森』の生死観の比較」
- 黄华莉、靳明全 2015 年《活着》与《挪威的森林》中生死观之比较；《当代文坛》；四川省作家协会
- 尚一鷗 2009 年村上春樹小説芸術研究
- 尚一鸥 2009 年村上春樹小说艺术研究；东北师范大学博士学位论文
- 周莹 2008 年死亡崇拜下の人道的配慮 — 村上春樹小説の死亡叙述研究
- 周莹 2008 年死亡崇拜下的人本关怀 — 村上春樹小说的死亡叙事研究；华中科技大学硕士学位论文
- 楊炳菁 2009 年 後現代語境中の村上春樹
- 杨炳菁 2009 年后现代语境中的村上春樹；吉林大学博士学位论文
- 村上春樹の『ノルウェイの森』と衛慧の『上海ベビー』の比較研究（仮題）「日本語文化論叢 創刊号」（2018 年 6 月芸術観光学研究所刊行予定）参照

The Research History of Haruki Murakami's *Norwegian Wood* in China

Xu, Cuiwei

This paper focuses on the research on a contemporary Japanese writer Haruki Murakami's masterpiece *Norwegian Wood* by Chinese researchers which has a history of nearly 10 years. It also gives a quick rundown of their research themes and features. Among them, the author introduces at great length some of the comparative studies of Chinese-Japanese literary works which can be found only in Chinese academia. While the researchers' opinions are introduced, they are also contrasted

with the idea of the author of this paper, who is also a Chinese researcher, and the difference is explained. After that, the author goes back to the work itself and offers her own opinions, while introducing other Chinese researchers' viewpoints about each character in the novel. At the end of this paper, the author predicts new research subjects for *Norwegian Wood* with the change of the times.